

喜連東遺跡

長居公園道路・地下鉄谷町線工事・公営住宅建替工事で室町時代の墳墓堂等が発掘され、喜連東は遺跡指定されました。また、喜連東老人憩の家建設の調査で喜連と東喜連の間に深さ10m以上の馬池谷が埋まっていることが判りました。発掘成果から東喜連南部の字山王一帯が古代喜連の中心地と推定されています。

飛雲紋瓦



図版は大阪市文化財協会
[大阪道跡]より

平城京・平安京・長岡京の三都以外には近江などごく限られた地でしか出土しない飛雲紋瓦が、長原・瓜破・喜連東の三遺跡から出土する。しかも三都タイプ1と近江タイプ2・3がそろって出土するのはこの三遺跡だけである。八世紀末に焼かれたとされるこの特殊な瓦の分布状況は、瓦が当地で製作され宮都に提供されていたと考えるのが合理的である。瓜破は近世～戦前まで瓦の地場産業があった。

室町時代の鬼瓦 喜連くん



墳墓堂と同じ字善法寺で、戦時中に喜連の中学生が発掘。如願寺文書に善法寺や橋本寺など7つの古代寺院が伝わる。鑑定で室町時代の鬼瓦と確定し、善法寺が中世まで存続したことが判った。橋本寺も本尊釈迦如来が河内長野延命寺に現存することが判り、1373年まで東喜連に実在したことが判明。南北朝等の戦乱で伎人郷中心地の山王一帯が焼失したと考えられる。

墳墓堂(廟堂)



瓦葺の小堂を伴う有力貴族・家族の墓所が発掘された。廟堂の周溝から平安京法勝寺の同範瓦も出土している。発掘時の字善法寺は古くは伎人郷入江の東岸、馬池谷埋積後は喜連の水源地を掘る地だった。周辺にはこのときの開発まで山王塚や中筋塚が現存し、東ノ宮(嵯峨神)や蔵垣内の字名を残した。近隣の発掘では居館跡や白磁など高価な磁器が出土し、善法寺～字山王一帯が古代～中世に栄えたことを物語っている。

